「ふるさと春日井学」研究フォーラム
Forum for Furusato Kasugai Studies
「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ
『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報
ＮＯ．96
2025.3.21 発行
編集責任者：河地　清
Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

９６回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

ﾃｰﾏ:『石に刻まれたふるさとの歴史』
ー日露戦役記念碑を中心にー

講師：河地　清　氏（「ふるさと春日井学」研究フォーラム会長）

2 月 22 日（土）ささえ愛センターで開催しました。
テーマは、『石に刻まれたふるさとの歴史』と題して、日露戦役記念碑を中心にして、石碑に刻まれた地域の歴史を垣間見てみた。無数の石碑の一つ一つは、その場所に存在感をもって建っています。路傍の石のように見えてもそこに刻まれた文字、彫刻は、後世に残したい、伝えたいという意志の表れであります。地域に暮らす人々の思いや願いが詰まったものです。今回は、日本が近代国家として世界の舞台へ登場しようとしていた時の歴史の画期となった「日露戦争」が、ふるさと春日井の神屋村にもあったことを示す石碑です。この一つの石碑から解ること、想像できることを解説していただきました。

参加者は 10 名でした。

郷土の歴史を石碑でたどる
春日井で講演

春日井市の郷土史研究家らでつくる「ふるさと春日井学研究フォーラム」の講演が2月22日、同市の市民活動支援センター（ささえ愛センター）であり、会長の河地清さんが「石に刻まれたふるさとの歴史―日露戦役紀念碑を中心に―」と題して語った＝写真。

同市神屋町にある「日露戦役紀念碑」には、日露戦争で神屋村（当時）の36人が戦病死、戦死したと刻まれている。春日井市史に残る日露戦役戦病死者統計表には神屋村の表記はないが、鳥居松村や鷹来村などと比較して、河地さんは「仮説ですが、神屋は戦死率が高い」と指摘した。

市内では他にも日露戦争の歴史を刻む石碑が内津町にある。揮毫（きごう）した軍人の乃木希典が、唐の書家・顔真卿の技法を用いており、乃木の鎮魂の気持ちを深く表しているという。

河地さんは「石碑を調べると地域の歴史が垣間見れる」と話した。講演後には、来場者から質問も寄せられた。

中日新聞記事（『2025 年（令和 7 年 3 月 2 日 ）』）

《講演要旨》

映像で二百三高地の激戦を観る

最初に、映像：ＮＨＫ司馬遼太郎原作『坂の上の雲』（旅順攻囲戦　前編）が上映され、旅順での激戦模様を観る。司馬史観による映像ではありますが、臨場感をもって、歴史を想像することができた。

「日露戦役紀念碑」（春日井市神屋町）の歴史的意義

写真図１

図１の写真は、春日井市神屋町の旧国道 19 号線（下街道）沿いにある。碑文「日露戦役紀念碑　陸軍中将従四位勲二等功三級　田部正壮書」とある。碑陰には、「日露戦役戦没者碑」として、戦病死１名戦死者 35 名の名前が刻まれており、明治四十四年之建となっている。こうして戦没記念碑は他にも数多くあって決してめずらしくはないが、この碑がとりわけ目にふれたのは、この地域の戦死者の数が他の春日井地域に比して以上に多いことである。

写真図２

「春日井市史」（昭和 38 年刊）の中に見る日露戦役戦病死者統計表によれば、出征数/戦死者数は、勝川町 117 名/29 名（24.8%）、鷹来村 62 名/8 名（13%）、坂下村 146 名/5 名（3.4%）、高蔵寺村 133 名/10 名（7.5%）、篠木村 36 名/18 名（50%）、鳥居松村 59 名/8 名（13.6%）神屋村の出生数は不明であるが、戦病死者は 36 名である。篠木村、鳥居松村よりも規模の小さな村落であったことを考えると、篠木村程度の出征数だとすればほぼ全滅に近い戦死者を出していることが推測できる。言うまでもなく、明治 37・38 年日露戦争は、先の 27・28 年の日清戦争とともに日本の経験したはじめての近代的な対外戦争であったのであり、特に日露戦争での犠牲が各村々に、多大の人的被害をもたらしたものであったことがこの碑から解る。石碑揮毫者、田部正壮は、第三軍将官として旅順攻囲戦を指揮した。戦後広島市長を歴任した軍人。この碑の揮毫はこの地域の多くの部下を失った事への鎮魂の書でもあった。　**図２**の写真は、第三軍を率いた乃木希典の揮毫した石碑である。春日井市内津町（内々津神社前）の小高い山裾の崖沿いに建っている。今も石碑にしめ縄が絶えない。軍神となった乃木将軍を祀るということと多くの戦死者を出した乃木の鎮魂の意を表す石碑となっている。

乃木希典の書―顔法の書―

顔真卿（７０８～７８５）中国唐時代の政治家、軍人。　安史の乱鎮圧で功績を挙げた。玄宗皇帝の忠臣。書の特色：「蚕頭燕尾」の筆法、王羲之の清爽な書法に対して「蔵鋒」の技法を確立。力強さと穏やかさを兼ね備えた独特の楷書。（顔法）○印の部分

性格は、「馬鹿がつくほどの真面目、剛直な人であった。」安史の乱で敵軍に一人で乗り込み敵首領安禄山から、「寝返りを迫られ」拒否したため処刑された。

乃木希典の書は、顔真卿の書法によって揮毫された優れた書である。

　乃木は、戦後明治天皇に責任を取って自決を申し出た際、明治天皇から「私が死んでからにせよ」と窘められた。

明治天皇崩御（1912年7月30日明治45年）後乃木は、9月13日自宅で妻と自刃する。

第3軍司令官 乃木希典

乃木希典とは、どんな人物であったか

『図説日本史通覧』（帝国書院）引用

嘉永２年11月11日（1849 年）生まれ～大正元年9月13日（1912年）没

「馬鹿がつくほどの真面目、剛直な人であった。」義気の人、忠義の人水師営の会見・武士道精神を貫いた人。水師営で会見したロシア軍敗軍の将②ステッセル将軍がニコライ皇帝から死刑を宣告されたとき、①乃木希典は、助命嘆願書を皇帝に出し救ったエピソードは、武士道精神の面目躍如たることを示すものであった。

（記録編集:河地　清）

OPINION　地域の文化財資産としての「石碑」の保存の重要性

一般的に「石碑」と呼ばれているものは、「石に文字や造形を刻んだ石造物」の総称を指しています。人類は古代の昔から自らの業を石に託して後世の人々に伝えようとしてきました。従って碑のあるところには必ず人間の暮らしがあっつたのであり、それなりの歴史があったのである。石に文字を刻むという考え方は、中国文化の中に強く根ざしたものであったようだ。古くは、周時代（紀元前 1046～256 年）のものといわれている石鼓に刻まれた石鼓文は、その最のものと言われています。

石に文字を刻むということは、その書が永久に残って行くことを強く自覚することですから、その文字の一文字一文字は、書法に合った優れた文字を残そう努力していたことが伺えるものです。そして、その文字には、地域の人々の、精神性、歴史性、文化性という人の魂が刻まれていることを伺わせるものである。秦の始皇帝は、かって大陸を統一し、中国最初の王朝を築いたとき中国全土の六カ所に天下統一の記念碑を建てたり、小篆、隷書をせいていしたりしたことは、その良い例です。

このように石に書を刻むという思想は、「常に永久不滅の願望」に基づく、後世への遺産であると考えることができます。私たちの地域の中にも、記念碑、顕彰碑、石仏、供養塔、庚申塔など無数にあります。一見路傍の石に見える石造物にも歴史があり物語（伝説、伝承）があります。**「左写真」**の石碑は、春日井市上条町の用水側溝に長い間うち捨てられていたものです。私の記憶では、半世紀ほど前からだと思います。最初は溝に横たわっていたと記憶しています。区画整理、インフラの整備等でその都度位置を変えて存在していました。何故か廃棄されないで、いつ頃誰が何の目的でどんな想いで、文字を刻んだのであろうか。

長い間路傍の石として訳あり気に転がっていた石碑は、平成 30 年 9 月 25 日に行われた、和爾良神社御旅所大日社遷座祭が執り行われた際に境内に「道風橋」という石碑として居場所を定められました。小野道風生誕伝説のある上条地域の人々の地域に対する「愛着」と「誇り」が路傍の石（石造物）に魂を注入した形になりました。路傍の石も文化財であると言う意識が大切である。「石」は只の石ではない、「躓く石も師と思え」の喩えのように、地域の歴史的、文化的、自然のものには意識をもって観察することが大切であることを教えられる。

（文責：河地　清）

かすがい市民活動情報ｻｲﾄ：http://kasugai.genki365.net/

ふるさと春日井学　検　索